

事例 1 Aさん

住宅街のケアホームで直接受け入れ。



本人のニーズ

- ・他人に迷惑をかけない生活が出来る様になりたい。
- ・自立して一人で生活したい。グループホームで生活したい。仕事がしたい。

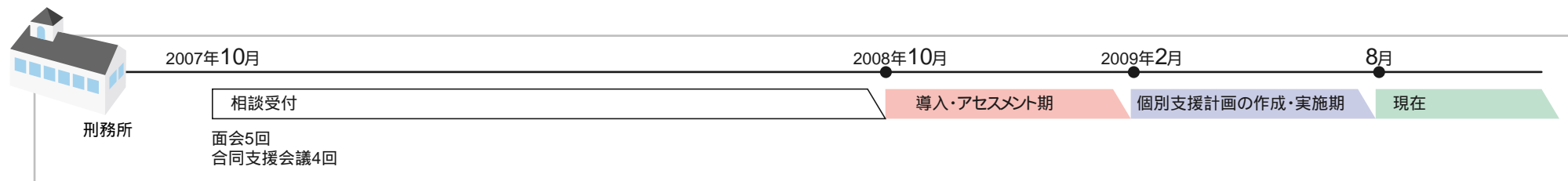
受け入れ

仮出所による受け入れ
窃盗を繰り返しているが、周囲の環境に影響されるものが大きいと判断し、住宅街のケアホームで受け入れる。

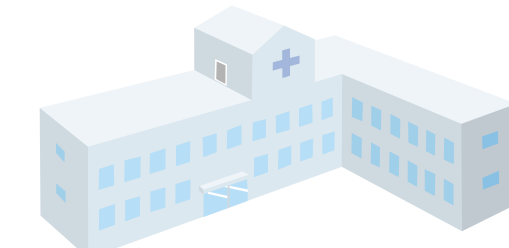
- 年齢(受け入れ時) 50代
- CAPASIQ相当値 40
- 療育手帳 なし
- 罪名 常習累犯窃盗
- 刑期 懲役2年
- 入所度数 3入
- 出所形態 常務理事を身元引受人としての仮出所による受け入れ

生活環境づくり

貴重品の管理の徹底。
日中活動の職員と連携を図るため、職員間で本人の毎日の申し送りファイルを作成。



導入・アセスメント期	個別支援計画の作成・実施期	現在
<p>仮出所期間中は、外出を制限。 本人が希望する就労に向けて、生活介護にて体力の維持・増進を図る。 日中活動、生活の場共に、職員に対して緊張が見られたが、徐々に緊張もほぐれ笑顔が見られるようになる。</p>	<p>体力がついてきたことから、就労継続支援B型へ移行。 ホームでは他の利用者との交流の中から、「母親的存在」に。「同年代がいるグループホームに住みたい」という希望が出てきたため、休日の体験利用を開始する。 外出も移動支援を使い多く取り入れる。</p>	<p>グループホーム、就労移行支援への移行を目指す。が、体調不良になり、現在入院中。</p>
<p>生活介護 (長崎県諫早市) 定員10名 職員6名</p>	<p>就労継続支援B型 (諫早市) 定員10名 職員4名</p>	
<p>職員配置 Aさん : 担当職員 (女性、勤続5年)</p>	<p>通常の職員体制</p>	
<p>活動内容 小動物の給餌等の管理作業 一般事業所(養鶏場)での集卵、洗卵作業</p>	<p>一般事業所(養鶏場)での集卵、洗卵作業</p>	
<p>生活の場 住宅街 定員6名(男女混合・重度) 職員1名(ケア職員付き)</p> <p>ケアホーム (長崎県諫早市)</p>	<p>体験実習先 他グループホーム 2軒 (職員通い型)</p>	
<p>職員配置 Aさん : 担当職員 (女性、勤続2年)</p>	<p>Aさん : 年齢性別共に様々な職員が加わる</p>	
<p>休日・外出 日用品の買い出し等、担当職員で行い、本人が行かなければならない外出は、職員がマンツーマンで付き添う。</p>	<p>4月中旬にはヘルパーの移動支援を取得。ケースを理解していただいているヘルパーと買い物や温泉へ外出。 7月頃から、休日前日は他グループホームへ体験実習。食事と入浴を共にすることで、同年代の女性同士で楽しくすごされている。行き帰りは送迎。</p>	



病院に入院
グループホーム・ケアホーム群の世話人、医務課が交代で毎日様子を見に行く。

キーパーソン = 特に設定せず

支援の流れ







導入・アセスメント期

期間: 2008年10月 ~ 2009年 1月

個別支援計画の作成・実施期

現在

本人を支える人的環境を整えて受け入れる。日中活動・生活共に状況把握と、安定した活動をめざす。

	事業所	職員配置	活動内容
 日中活動	 生活介護 (長崎県諫早市) 定員10名 職員6名	 Aさん 担当職員 (女性、勤続5年)	小動物の給餌等の管理作業 一般事業所(養鶏場)での集卵、洗卵作業
 生活の場	 ケアホーム (長崎県諫早市) 定員6名(男女混合・重度) 職員1名(ケア職員付き) 住宅街の中	 Aさん 担当職員 (女性、勤続2年)	日用品の買い出し等、担当職員で行い、本人が行かなければならない外出は、職員がマンツーマンで付き添う。

就労を目指し体力の維持・増進を図る

ねらい 留意点

就労を目指して休まず出勤することを目標に、固定した日課を組み生活介護の活動に慣れていただくことに重点をおいた。職員と数人のグループでの活動で取り組むが、特別な体制は置かなかった。当初は休憩中も職員が通ると姿勢を正すところが見られ緊張を感じた。また施設が山間にある為に、徒歩での移動にも疲れが見られたが、作業を続ける中で徐々に体力もついてくる。

作業はガチョウ、アヒル、ウサギ等の小動物の管理作業と、花と植物等のお世話を担当。作業態度は良好で2~3回の説明で理解された。2か月ほどして休憩中の緊張も薄れ表情よく取り組まれていた。

役割の設定

ホームが自分の居場所であると感じていただけるよう、役割設定(日々の夕食作りの手伝い、食器洗い、トイレ掃除)を行う。毎日の繰り返しのなかで本人の苦手な所、不十分な所についてアドバイス・助言を行い、本人がやりがいや責任感を持てるようにする。また、常に感謝を伝え、本人がホームの仲間であるという意識をもてるように支援を行った。

信頼関係の構築

生活担当、日中担当とは別に、全体の支援者としてサービス管理責任者、身元引受人、保護司と本人にわかりやすく濃淡をつけて関わりを持つ。それぞれの関わりの中、本人が話しやすい環境をつくれるよう支援を行う。家族の存在がないため、本人の思いや願い等を話せる相手が作れるようにする。

ねらい 留意点

本人の特性がどのように出るのかを把握し、地域で生活を送るために、罪を繰り返さないための生活環境づくりを行った。







職員の思い

ホームでの受け入れ初日、とても緊張した。どんな性格なのか、どんな特徴があるのかなど、想像を膨らませることはばかりであった。本人が今まで生きてきた背景を知るとはとても大切なことだが、事前に頂いた書類には、専門的な用語や罪名等が多く、実際の支援に生かせる情報は少なかった。そのため、不安も大きい。

しかし、実際に本人と対面すると、普通に世間話ができて、周りに気遣いの出来る人だった。担当職員として紹介されると「自分の娘ぐらいの年齢だ」と驚くと同時に「お母さんだと思ってください」と受け入れてくださった。私は、本人との年齢の差にも大きな不安を抱いていたが、この言葉をきっかけにして親子のような関係性作りを行えるよう支援した。

導入・アセスメント期 個別支援計画の作成・実施期 現在
 期間:2009年2月～2009年8月

信頼関係が築かれる。日中活動は就労継続支援B型へ移行。

	事業所	職員配置	活動内容
 日中活動	 就労継続支援B型 (諫早市) 定員10名 職員6名	 通常の職員配置	一般事業所(養鶏場)での集卵、洗卵作業
 生活の場	 ケアホーム (諫早市) 定員6名(男女混合・重度) 職員1名(ケア職員付き) 住宅街の中 他グループホーム2軒 定員3～4名(職員通い型)	 Aさん 年齢性別共に 様々な職員が加わる	4月中旬にはヘルパーの移動支援を取得。ケースを理解していただいているヘルパーと買い物や温泉へ外出。 7月頃から、休日前日は他グループホームへ体験実習。食事と入浴を共にすることで、同年代の女性同士で楽しくすごされている。行き帰りは送迎。

個別支援計画

支援の全体目標	本人の成育歴や特性を知り、信頼関係の構築を図る。			
ニーズ(解決すべき課題)	支援目標	サービス内容	頻度・時間	目標達成時期
生活環境の確立	ホーム内での役割設定を行い、本人がやりがいや責任感を持てるようにする。	ホームが自分の居場所であると感じていただけるよう、役割設定を行い、アドバイス、助言、感謝を伝える。本人がホームの仲間であるという意識をもてるようにする。	毎日	2009年4月
信頼関係の構築	家族の存在がないため、本人の思いや願い等を話せる相手が作れるようにする。	生活担当、日中担当とは別に、全体の支援者としてグループ長、身元引受人として常務理事、保護司として理事長というように、本人にわかりやすく濃淡をつけて関わりを持つ。それぞれの関わりの中かで、本人が話しやすい環境をつくる。	随時	2009年4月
就業面	健康で仕事ができるよう、体調管理等行なう。	本人から仕事の話も聞き、健康面や体力面の把握を行う。日中の職員、医務担当の職員と連携し、無理なく仕事ができるよう支援を行う。	随時	2009年4月
社会性	基本的な社会性を身につける。	本人の特性がどのように出るのか把握し、罪を繰り返さずに社会生活を営めるような環境設定を行う。	随時	2009年4月

(2008年10月1日作成)

一般事業所での実習に移行

2月より養鶏農家にて職員と数人のグループで集卵・洗卵作業の実習に取り組む。体力的な不安や施設外での取り組みの中で心の変化等ないのか懸念されたが、3月末まで継続して取り組むこととなる。4月から正式に就労継続支援B型へ移行し、月15,000～18,000円の工賃を支給される。就労状態は安定して取り組まれている。



ホームでの母親的存在へ

初めは発語のないYさん（障害程度区分5）との関わりを増やし、ピアカウンセリングの役割設定も考えていた。しかし、発語のない方との関わりをどうしたらいいのか分からず、戸惑っている様子もあり、職員を介して少しずつ関わりを持ち、今では自分から積極的に話しかけたり、誘導して下さることが増えた。

他には他メンバーの方の食事の片付け、身の周りの世話、話し相手となって下さり、本人もそれを楽しんでいる様子がうかがえた。本人以外は全員男性利用者のため、家事や料理など、職員と一緒にいき、本人の中でも「みんなのお母さん！」という意識が出てきたように感じる。他利用者の中で「さんが作った」「さんがしてくれた」と伝えることで、他利用者から感謝の言葉もあり、本人のやりがいへとつなげていった。

信頼関係の構築

ホームへ来た当初は、慣れないこと、刑務所を出たばかりということもあり、職員に対しびくびくしている様子があった。職員が近くを通ると背筋が伸びたり、居室でゆっくりしている時も、ノックをしてのぞくと急いで正座をしたりと、心が休まる場所ではなかった様子。しかし、徐々に本人の緊張もとけ、お互いが肩の力を抜いて接することが出来るようになった。

本人との関係性を深めるため、ノートを交換していた。何か困ったことや分からないこと、口では言いにくいことがあれば、何でも書いて持ってきてもらうように約束をした。初めの頃は、「反省している」「もう戻りたくない」等の反省の言葉が多かった。しかし、ホームでの生活を繰り返し、多くの職員や利用者に関わっていく中で、職員の話や自分の希望等を書いてくるが多くなった。生活における希望や今後の不安、仕事の希望や不満等を話すことが出来るようになっていく。

余暇活動の充実についても、やりたいことがある時は、自分から主張出来ており、職員との信頼関係が構築されていった。

一緒に入浴を行う

週に1度は一緒に入浴をした。「娘と入っているみたい」と照れくさそうにされていたが、親子として、女同士として色々な話をする事ができた。入浴中の関わりは、本人の本音や過去、気持ちをゆっくり聞くことのできる貴重な時間であった。

マンツーマンでの外出支援

買い物や外出は必ずマンツーマンで支援が出来るように配慮した。ホームでの外出も担当者とは別に、必ず1人フォローに来てもらい目の行き届く範囲での支援を行った。徐々に本人の金銭管理能力や特性が分かってきた。全体で動くよりも自分のペースで行動したいという本人の希望もあり、ヘルパーの移動支援を取得。本人のケースを十分に把握して頂き、ヘルパーと2人での外出も可能になった。

導入・アセスメント期

個別支援計画の作成・実施期

現在

期間:2009年8月～

9月～10月頃には、就労移行支援へ籍を移し、一般就労を目指すように計画していた。

生活の場でも同年代の方や、異性との関わりが増えていくにつれて、本人の中で「グループホームに住みたい」「お茶飲み友達が欲しい」という希望が出てきた。6月からは同年代の方がいるグループホームで、夕食や入浴をしてお喋りをして帰ってくるという時間を設定した。

しかし、7月より体調不良があり、病院通いが多くなり、医療的な支援が必要になる。8月より入院をしているため、現在は体調を治し、1日も早くホームに戻りたいという本人の目標がある。家族との関わりがないため、家族の代わりとなれるような支援が求められている。職員が毎日交代で様子を見に行き、本人の医療的状態や精神的状態を共通理解し、安心して治療に専念できる環境作りを行っている。

支援のまとめ

1

直接、地域のケアホームで受け入れた。周囲にスーパーや本人を刺激しかねない因子はあるものの、バックアップ施設が近くにあり、近隣にベテランの世話人さんも多く住んでいるという「本人を支える人的環境」を手厚く整えることで、矯正施設から直接、地域のケアホームでの受け入れが可能になった。